

平成 14 年 7 月 17 日

昔の豊島区を気軽に訪ねてみよう

2002 年度第 1 回収蔵資料展 「浮世絵そぞろ歩き」 始まる

本日 17 日より、区立郷土資料館（西池袋 2-37-4 勤労福祉会館 7 階）で、2002 年度第 1 回収蔵資料展「浮世絵そぞろ歩き」が始まった。会期は、前期：2002 年 7 月 17 日（水）～8 月 17 日（土）、後期：8 月 20 日（火）～9 月 29 日（日）。

「浮世絵」は、当世風という意味の「浮世」を描いた風俗画で、江戸の庶民文化を反映したもの。今というポスターや絵本、雑誌等に相当するものだった。かつて「江戸絵」とも呼ばれ、目に鮮やかで軽量だったため、江戸のガイドブックとして地方へのお土産としても人気があった。このように、当時の人々に気軽に楽しまれた浮世絵を通して昔の豊島区をそぞろ歩いてもらおうと今回の展示を企画。郷土資料館が開館以来、「豊島区の昔を知るための視覚的資料」として収集してきた豊島区関連の館蔵浮世絵版画約 40 点を前期・後期に分けて展示する。浮世絵は退色しやすいため、資料保護の観点から 1 ヶ月で展示変えを行う。

初代広重、二代広重をはじめ、江戸時代から明治時代にかけて区内外の情景を描いた風景版画を中心とした多彩な浮世絵を、「復刻 富嶽三十六景」「富士見茶屋から見渡して」「雑司谷八境」「鬼子母神」「染井・巢鴨は花の名所」「江戸の花めぐり」「子どもの浮世絵おもちゃ絵」「豊春と歌川派」という、8 つのテーマごとにコーナー展示し、様々な角度から豊島区を束ねた内容となっている。

「復刻 富嶽三十六景」のコーナーでは、豊島区指定無形文化財保持者に認定され、1999 年に亡くなった摺師、佐藤勘次郎さんの作品を摺り道具とともに展示した。浮世絵版画は、絵を描く絵師、版木を彫る彫師、色を重ねて摺る摺師の業があって初めてひとつの作品となる。ここでは、佐藤氏が摺って現代に蘇らせた「富嶽三十六景」を中心に、葛飾北斎の傑作、佐藤氏の匠が伝わる内容となっている。

鬼子母神参りの道々の情景を通し、当時の長崎村から雑司が谷村にかけての情緒豊かでのんびりした人々の暮らしを俳諧と絵で描いた「雑司谷八境」、お会式の様子などを描いた「鬼子母神」、園芸が盛んで江戸市中から日帰りの行楽地として見物客を集めた巢鴨・駒込の様子を描いた「染井・巢鴨は花の名所」は、いずれも当時の豊島区の様子をよく伝えている。

初代歌川広重が現在の学習院大学構内の高台にあった富士見茶屋を題材に描いた 2 つの作品は、4 年の歳月を隔てて描かれたもので、ポイントが女性のファッション等「人」から「風景」へと変化するなど、視点の変化が面白い。また豊島区の風景なども数多く残した浮世絵の大画派「歌川派」のコーナーでは、西洋の遠近法をとり入れた浮絵、役者絵などから当時の娯楽のポイントを知ることが出来る。

江戸後期から明治にかけて、流行したおもちゃ絵も見所のひとつ。お面や当時の人気スポーツ選手だった相撲力士、女性などの絵を一面に描いた「～尽くし」シリーズは、切り抜いてメンコにしたり、着せ替え人形にしておままごとに使ったりと自由な発想で遊ぶことが出来、今で言う図鑑のような教育的側面も併せ持っていた。

このように、浮世絵からは当時の人や地域の様子を伺い知ることができ、1 枚の絵にもみるポイントがいくつも潜んでいる。「その人なりのテーマで、散歩気分であらゆる見どころを」と資料館の担当者は話す。また資料館では、展示した資料が、それぞれ豊島区のどこ周辺を描いたものかを示した「浮世絵マップ」を配布。浮世絵に重ねあわせて史跡を訪ねていけるようにした。

尚、7 月 28 日（日）、8 月 10 日（土）、8 月 25 日（日）、9 月 14 日（土）、9 月 29 日（日）の各日午後 2 時から、展示説明会が行われる（予約不要）。

詳細 郷土資料館

平成 14 年 8 月 27 日

昔の豊島区を気軽に訪ねてみよう

2002 年度第 1 回収蔵資料展 「浮世絵そぞろ歩き」 開催中

区立郷土資料館（西池袋 2-37-4 勤労福祉会館 7 階）収蔵展示室で、2002 年度第 1 回収蔵資料展「浮世絵そぞろ歩き」が開催されている。7 月 17 日（水）から 8 月 17 日（土）までの前期に続き、8 月 20 日（火）からは後期の展示が行われている。9 月 29 日（日）まで。

「浮世絵」は、当世風という意味の「浮世」を描いた風俗画で、江戸の庶民文化を反映したもの。今でいうポスターや絵本、雑誌等に相当するものだった。かつて「江戸絵」とも呼ばれ、目に鮮やかで軽量だったため、江戸のガイドブックとして地方へのお土産としても人気があった。このように、当時の人々に気軽に楽しまれた浮世絵を通して昔の豊島区をそぞろ歩いてもらおうと今回の展示を企画。郷土資料館が開館以来、「豊島区の昔を知るための視覚的資料」として収集してきた豊島区関連の館蔵浮世絵版画約 40 点を前期・後期に分けて展示する。

初代広重、二代広重をはじめ、江戸時代から明治時代にかけて区内外の情景を描いた風景版画を中心とした多彩な浮世絵を、「復刻 富嶽三十六景」「富士見茶屋から見渡して」「雑司谷八境」「鬼子母神」「染井・巢鴨は花の名所」「江戸の花めぐり」「子どもの浮世絵おもちゃ絵」「豊春と歌川派」という、8 つのテーマごとにコーナー展示し、様々な角度から豊島区を束ねた内容となっている。構成は、前・後期ともに同じだが、展示替えを行い、展示作品を一新した。

今回の展示のなかでも面白いのが、「鬼子母神」のコーナーにある「江戸高名会亭 雑司ヶ谷之図」（初代歌川広重、館蔵）。これは、当時の有名料理屋を描いた全 30 枚シリーズのうち一枚で、雑司が谷鬼子母神の参道にあった「茗荷屋」という茶屋を描いたものだ。1835 年頃～1840 年に描かれた作品と思われる。茶屋の入口右手には「御料理めうがや」と書かれた看板が、左手には「仙女香 坂本氏」とみえる。「仙女香」とは、南伝馬町の坂本屋から売り出し中の白粉のことで、言うなれば『化粧品のコマーシャル付有名レストランのポスター』といった趣のもの。入口の付近には、茗荷屋を訪れたと思われる人々の姿が描かれ、まさに「そぞろ歩」いている。

大和郡山藩の二代藩主であった柳沢信鴻（やなぎさわのぶとき）は、現在の六義園の地にあった別邸で隠居中、たびたび茗荷屋を訪れたことを日記『宴遊日記』に記している。1785 年 12 月 19 日には、茗荷屋で蕎麦を注文したが混んでいて 1 時間も待たされたとあり、この頃にはすでに評判の茶屋だったことが推察される。また、十返舎一九が書いて葛飾北斎が絵を添えた『雑司谷紀行』（1821 年刊行）に登場したり、後の「彰義隊」が第 1 回目の会合を茗荷屋で開くなど、茗荷屋は武家の日記、滑稽本、歴史の舞台としてその名が記録に残されている。

「復刻 富嶽三十六景」のコーナーでは、**豊島区指定無形文化財保持者**に認定され、1999 年に亡くなった摺師、**佐藤勲次郎さん**の作品を摺り道具とともに展示した。浮世絵版画は、絵を描く絵師、版木を彫る彫師、色を重ねて摺る摺師の技があって初めてひとつの作品となる。ここでは、佐藤氏が摺って現代に蘇らせた葛飾北斎の傑作、「富嶽三十六景」36 枚を一堂に展示、また**摺り上がっていく過程がわかる「順序摺」**の「高島おひさ」（喜多川歌麿原画）も展示している。

「染井・巢鴨は花の名所」のコーナーでは、当時植木・花卉で有名だった染井（現駒込）・巢鴨の様子を描いた作品を紹介している。この周辺の様子を題材にした作品は多数残されており、観光地として江戸市中から見物客を集め、地方にも広く紹介された観光地だったことがうかがえる。この地域を通り、今年開道 400 年にあたる中山道は、江戸市中からの観光客と地方と江戸を行き交う商人、参勤交代に従う侍たちでにぎわった。**浮世絵は恰好のお土産品だったようだ。**

この他にも、江戸後期から明治にかけて流行したおもちゃ絵など、見所はたくさんあり、作品からは当時の人や地域の様子を様々にうかがい知ることができる。「気軽に訪れて、浮世絵を通して豊島区をそぞろ歩いて下さい」と資料館の担当者は話す。また資料館では、展示した資料が、それぞれ豊島区のどこ周辺を描いたものかを示した「**浮世絵マップ**」を配布。浮世絵に重ねあわせて史跡を訪ねていけるようにした。

尚、9 月 14 日（土）、9 月 29 日（日）の各日午後 2 時からは、展示説明会が行われる（予約不要）。

詳細 郷土資料館